

総 説

1964年 東京パラリンピック

中村太郎

社会福祉法人 太陽の家 社会医療法人 大分中村病院

【緒言】

2020年東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることが決定した。しかし1964年の東京オリンピックに併せて東京パラリンピックが開催されたことを知る人は数少ない。

本稿では英國ストークマンデビル病院国立脊髄損傷センターで、ルードヴィッヒ・グッドマンが脊髄損傷者への治療の一環として始めたスポーツを用いたリハビリテーションが、どのような経緯でパラリンピックに発展していったのか、グッドマンのもとに留学した中村裕の東京パラリンピック開催への関わり、そして東京パラリンピック開催後の『日本パラブレジア医学会』(現日本脊髄障害医学会)の創設、『財団法人日本身体障害者スポーツ協会』(現日本障害者スポーツ協会)が設立され、国体の後に、『全国身体障害者スポーツ大会』(現障害者スポーツ大会)を毎年開催されるようになったこと、No charity, but a chanceを理念に、障がい者が働き自立することを理念に『社会福祉法人太陽の家』が創設されたことなど、50年前に開催された東京パラリンピックが、果たした役割について述べる。

《パラリンピックの創設者 ルードヴィッヒ・グッドマン》

ルードヴィッヒ・グッドマンは1889年旧プロシア領南東部のアッパーシレシアのトストに産まれた。ブレスラウ大学医学部のフォスター教授に対麻痺患者の新しい治療法を学び、汗の神経支配の研究をしてキニーネによる発汗テストを考案した。ユダヤ人であったため、ナチスによるユダヤ人排斥運動が強まつた、1939年に妻と二人の子供を連れ、ドーバー海峡を小さな舟で渡り、無一文で英国に亡命した。そしてオックスフォードのパリオル大学で神経損傷の研究をしていた。

《チャーチルが創った国立ストークマンデビル病院脊髄損傷センター》

連合軍は第二次世界大戦末期、ノルマンディー上陸作戦を計画していた。英國の首相チャーチルは、このような大規模な戦場では多数の戦傷者が出来ることを予想し、戦傷者には最高の医療を施すべきとの強い信念のもと、救急病院や社会復帰のための施設、さらには孤児や未亡人に対する政策など周到な準備をして作戦に臨んだ。その一つとしてロンドン西北部のアイレスバリーという町の外れにあるストークマンデビル病院内に国立脊髄損傷センターが創立し敵国ドイツ人であ

1964 Tokyo Paralympic
T. Nakamura.

Key words : paralympic (パラリンピック), sport for disabled (障害者スポーツ), spinal cord injured (脊髄損傷)

ったグッドマンに開設を委ねた。そしてグッドマンは戦場から送還されてくる脊髄損傷者の治療と社会復帰に大きな成果をあげた。

《ストークマンデビル病院での脊髄損傷者の治療》

第二次世界大戦時の脊髄損傷者の救命率はわずか2割であった。グッドマンは、ストークマンデビル病院で、急性期の医療だけでなく、完全に社会復帰するまで面倒を見る医療を理念にしていた。医師のみならず看護師やPT(理学療法士)、OT(作業療法士)、RG(医療体育士)、ソーシャルワーカーなども加えたチーム医療と、残存機能を強化するため、スポーツを取り入れたりリハビリテーションが治療の二本柱であった。ストークマンデビル病院だけでなく、脊髄損傷者を受け入れる英國社会の方も、職業訓練センターや国立の保護工場などが機能し、保健省、労働省、教育省が一体となって早期に社会復帰出来るシステムができていた。このため6ヶ月の治療期間で85%の脊髄損傷者が有給で社会復帰するという驚異的な成績をあげ、グッドマンは、世界的な名声を得ていた。1945年には「脊髄損傷患者たちの新しい期待」という論文で「以前は亡くなることが多かった脊髄損傷者が第二次世界大戦後は救命でき社会復帰できる」ことを公表した(図1)。

《ストークマンデビル競技会の始まり 一失われたものを数えるな、残っているものを最大限に活かせ》

グッドマンは、ストークマンデビル病院で脊髄損傷により車いすの生活となり、落ち込んでいる患者に「失われたものを数えるな、残っているものを最大限に活かせ」といってスポーツを勧めた。脊髄損傷者の治療だけでなく、いかに力強く生きる希望を与えられるかを医師の重要な役目と考えていた。ストークマンデビル病院でのスポーツ種目は陸上、水泳から車いすバス



図1 グッドマンのストークマンデビル病院での回診風景 1960年頃

ケットボール、アーチエリーとしたいに増えていった。

1948年7月28日、ロンドンオリンピックの開催日と同じ日に病院内で脊髄損傷者のアーチエリー大会が開かれた。わずか16名（男性14名女性2名）の英国退役軍人による大会であったが、これがパラリンピックの原点である。1952年にはオランダ退役軍人チームが参加し初めての国際大会となった。1960年、国際ストークマンデビル競技連盟（図2）が設立され、ローマオリンピックを機に、オリンピック開催年にはオリンピック開催国で国際ストークマンデビル競技会を開催することとした。そしてそれ以外の年は毎年7月にストークマンデビル病院で国際競技会を開催することとした（図3）。しかしローマ、東京以降は1988年のソウルまでオリンピックと同都市で開催されること



図4 1960年、ストークマンデビル病院に留学した中村裕（右）とグッドマン（左）



図2 1964年 東京パラリンピックのポスター、右 1972ハイデンベルグパラリンピック（オリンピックはミュンヘン）のポスター。グッドマンは脊髄損傷者だけの大会そしてストークマンデビル競技会であることに拘った。東京のポスターのパラリンピックの文字は、ハイデンベルグでは消え、ストークマンデビル競技会としか記されていない



図3 ストークマンデビル病院でのアーチエリーカー競技。わずか16人の退役軍人を集め、ロンドンオリンピックの開会式に合わせアーチエリー競技を開催したのがパラリンピックの原点である 1960年頃

はなかった。

《1961年 日本で最初の障害者スポーツ競技会 大分県身障者体育大会の開催》

1960年に天児民和（九州大学整形外科教授、当時）の命を受け、ストークマンデビル病院のグッドマンのもとへ留学した中村裕（国立別府病院整形外科部長、当時）は、ストークマンデビル方式を、日本に取り入れることを目標に帰国した（図4）。下肢の麻痺の回復が不可能な脊髄損傷者も残存機能強化のためのリハビリテーションを行い、そのリハビリテーションにはスポーツを取り入れて、心理的効果も加え、社会復帰するという方法である。しかし、職場や周りの関係者から、脊髄損傷者にスポーツを勧める中村は猛反対をくらった。「せっかくよくなりかけたものを悪くするようなものです。スポーツをして悪くなったらどう責任をとるのですか？」「あなたは医者なのに、身障者を公衆の面前に出してサーカスのような見せ物のようなことをやろうというのですか？」と無謀視するばかりであった。当時の日本のリハビリテーション施設の多くは温泉地にあった。リハビリテーションといえば温泉に入ったり、マッサージをしたり、電気で刺激したりであったのである。しかし、周囲の反対を押し切り、1961年10月に日本で初めての身体障害者の体育協会である大分県身体障害者体育協会を設立し、大会を開催した。車いすバスケットは人数が足らず国立別府病院の整形外科医チーム対脊髄損傷の患者チームで試合を行った（図5）。場所も、施設も、道具、スタッフも、そして理解者もいない中で、従来の福祉的なレクリエーションの運動会のような大会とは異なる、医学的根拠にたった、組織立った障害者のスポーツを必死に推進しようとする中村は「物好きな人だ」くらいにしか評価されず、周囲の目は冷淡であった。

《雲をつかむような東京パラリンピック開催》

中村がストークマンデビル病院に留学していた1960年は英國以外の場所で最初に開催されたローマでのストークマンデビル競技会であった。現在ではこの大会が第一回パラリンピックとされる。ストークマンデビル方式を取り入れて建設されたイタリア初の脊髄損傷センターの所長であるマリオ博士の多大な協力



図5 日本で初めての障害者のスポーツ大会
大分県身体障害者体育大会。日本は最初から脊髄損傷者だけでなく全ての障害者が参加する競技会を志向した。選手数が足りず国立別府病院の整形外科医師チーム対脊髄損傷の患者チームの車いすバスケットボール 1961年大分市、別府市

があった。中村は、グッドマンからローマ大会の様子をつぶさに聞き、今後オリンピック開催年は、同じ都市で国際ストークマンデビル競技会を開催する方針を聞いて帰国していた。このため東京オリンピック後に東京で国際ストークマンデビル競技会を実現することを、中村は自分の使命と心得ていた。グッドマンは1962年頃から日本の有力者に1964年に開催される東京オリンピックの直後に同じスタジアムと選手村を使って国際ストークマンデビル競技会が開催されるよう協力を頼む旨の書簡を送った。しかし厚生省はじめ関係方面では、いっこうに腰はあがらなかった。後に東京パラリンピック会長となる葛西氏らは「何でもオリンピックの後で国際的な身体障害者スポーツ大会をやらねばならないらしい」と関係者から聞き、「身体障害者スポーツ振興会」を設立したものの活動は殆ど行ってなかった。日本では大分で1961年に最初の身体障害者スポーツ大会が行われただけで、身体障害者のスポーツ大会、それも国際大会など、何をどうしてよいのか、誰も全くわからず活動のしようもなかったのである。一方で中村は、苦労を重ね何とか実現した大分での身体障害者体育大会の反響がゼロであったことにはせりを感じていた。そこで、「日本人は事大主義だ。東京、さらには欧米を含んだ大会を開けば障害者スポーツの展開は一気に好転する」と戦略をたてた。大分と東京を頻回に夜行列車で往復し、「東京オリンピックの後に、身体障害者のスポーツ大会を開催できなければ福祉国家日本の看板は国際的にみて偽りになるであろう」と熱弁をふるい、関係者の説得にあたっていた。戦後、欧米に追いつき追いつき越せの時代に、パラリンピックを開催できなければ、日本はまだ先進国ではなく欧米に劣るというような説明をしたのである。

《東京パラリンピック準備委員会開催と国際ストークマンデビル競技会に初めての日本人選手派遣》

1962年5月、朝日新聞社で「国際身障害者スポーツ大会準備委員会」が開催され、葛西氏（社会福祉事業

振興会会长 当時）が委員長に就任した。この席でその年の夏に英国で開催される国際ストークマンデビル競技会に日本から初めて選手を派遣することを決めた。国際ストークマンデビル競技会に日本から初めて選手が出席する様子を華々しく報道してもいい。障害者スポーツへの社会の認知を高め、東京パラリンピックへの動きを加速しようというマスコミを活用する中村の広報作戦の一環でもあった。団長は大分県厚生部長の平田準氏、中村が副団長となり、中村は自分の二人の患者を日本代表選手として、国立別府病院で強化合宿を行った。表向きは日本選手団とはいえ実態は大分県チームであった。とはいえ、日本選手団の壮行会は首相官邸で開かれ、当時の池田勇人首相や大平正芳官房長官が出席し「前向きに戦い、日本男子の意気を示したまえ」と両選手と固く握手をかわした。選手団は待ち構えていた官邸記者や新聞記者に囲まれ眩いばかりのフラッシュをあび、翌日の新聞は「身障五輪に日本初参加」と大きく報じた。天声人語も「心から声援を送りたい」と書いた。初参加の日本選手団は英国で大歓迎を受けた（図6）。一行が帰国すると皇太子殿下夫妻から東宮御所に招かれ、二人の選手は御所でご夫妻の卓球のお相手をした。翌年も日本は2名の選手を派遣し、会議の席上で来年の、すなわち1964年の東京オリンピック後に、国際ストークマンデビル競技会を東京で開催することが決定した。



図6 第11回国際ストークマンデビル競技会へ日本から初参加した伊藤工選手、吉田勝也選手と中村裕（1962年7月 ストークマンデビル）

《1964年グッドマン初来日》

東京パラリンピック開催の5ヶ月前の6月1日、グッドマンは国際ストークマンデビル競技連盟事務局長のスクルトン女史とともに初来日した。グッドマンは東京パラリンピック運営委員長であり東京の会場や選手村を視察した。そしてオリンピックはギリシャが発祥の地なので一番に入場するがパラリンピックは英国が発祥の地なので最初に入場する、などを議論した。グッドマンは東京視察の後、大分を訪問し第四回大分県身体障害者体育大会を視察した（図7）。別府市の杉の井ホテルでの歓迎レセプションが天児民和主



図7 初来日したグッドマン(左端)とスクルトン(中央)と中村裕(右端)。中村に抱かれているのが著者(当時三歳)

催で行われ、グッドマンは「脊髄損傷者の第一回スポーツ大会は13年前、ロンドンのストークマンデビル病院で開いた。日本の第一回大会は4年前に大分で開かれ、ともに大きな成果をあげている」とスピーチした。

《パラリンピックの語源》

グッドマンは頑として「全ての障害者の参加する大会」を開こうとせず、脊髄損傷者だけの大会に拘った。そして自分が関与する大会に「ストークマンデビル競技会」以外の名称を使用することを好まなかった(図8)。しかし中村ら日本関係者は大分県身体障害者体育大会、そして東京パラリンピックも「あらゆる障害者の参加する大会」を志向した。

パラリンピックという言葉は1964年の東京パラリンピックで初めて用いられた。だれが考案したかはわ



図8 國際ストークマンデビル競技連盟のロゴ。スポーツを介して障害者が一つになり、夢と希望を与える、国家間の友情と理解の手助けをしようというストークマンデビル競技会の理念は三つの車いすの車輪を組み合わせたロゴに表されている。三つの車輪は「友情」「統合」「スポーツマンシップ」を表している

かっていない。東京パラリンピック会長を務めた葛西嘉資は「パラリンピックというのは、下半身麻痺のパラブレジアのパラと、オリンピックのリンピックをつなぎあわせたもので、車いすを使う下半身麻痺者のスポーツ大会という意味になり、今回の大会の第一部だけにあてはまる言葉である。しかし身体障害者はそれだけではない。他にも手足や目や耳の不自由な人々も、たくさんいる。そしてせっかく身体障害者の国際大会を日本でやるのだから、これらの人たちにも、ぜひ、参加して貰いたいということで、第二部を設け、広く全身体障害者の大会にしたわけである(パラリンピック東京大会報告書)。障害をもった人たちのスポーツは脊髄損傷者、切断者、脳性麻痺者、視覚障害者、知的障害者と障害別に組織され、発展してきた。東京パラリンピックを「あらゆる障害者の参加する大会に」という日本側の苦肉の策として、第一部が車いすの選手による第13回国際ストークマンデビル競技会、第二部が国内の車いす選手を除いた他の身体障害者及び聴覚障害者、視覚障害者、そして西ドイツの特別参加を加えた大会として開催されたのである。日本が1964年の東京パラリンピックで実現しようとした、全ての障害者が参加する大会は、1/4世紀後の1988年のソウルパラリンピックまで待たねばならなかつた(図8、9)。パラをこれまでのパラブレジア(下半身麻痺)ではなく、パラレル(parallel 平行する)という意味で使用することになった。オリンピックに対する「もう一つのオリンピック」という意味合いになった。

《東京パラリンピック開催》

体操のチャフラフスカ、バレーボールの東洋の魔女、マラソンのアベベの華々しいオリンピックが終了した18日後に東京パラリンピックは正式名を「国際身体障害者スポーツ大会」として11月8日から5日



図9 The 1964 International Stoke Mandeville Games for the Paralysed in Tokyo. 國際ストークマンデビル競技連盟発行(1964年東京パラリンピックの第一部、第13回国際ストークマンデビル競技会に限って報告されている。Paralympicの言葉はない



図10 東京パラリンピック開会式 中村裕が日本選手団団長を務めた。日本選手団53人中17人は中村の患者であった

間開催された。会場はオリンピック選手の練習場であった織田フィールドであった。会場には日の丸や参加国の国旗とともに国際ストークマンデビル競技連盟の旗(図8)が秋空の中にあった。大会名誉総裁の皇太子殿下、美智子妃殿下はじめ、4000人の観衆の見守る中で「上に向いて歩こう」のマーチに沿って入場行進が行われた。21ヶ国387名、日本からは53名が参加し団長を中村が勤めた(図10)。参加国はアルゼンチン、オーストラリア、オーストリア、ベルギー、セイロン、フィジー、フランス、ドイツ、イギリス、イスラエル、アイルランド、イタリア、日本、マルタ、オランダ、フィリピン、ローデシア、南アフリカ、スウェーデン、スイス、米国であった。英国の選手が最も多く70名、米国67名、イタリア27名、西ドイツ24名であった。新幹線が走り、東京タワーが建設され、高速道路ができ、そして東京オリンピックが開催された。東京の街には新しいビルが建ち始め、高度成長期



図11 欧米の選手に何かあったら大変と選手1人あたり2人の自衛官がつけられた。
当時の日本では障害者はかわいそうな人で、保護すべき人であった
右：三越デパート（日本橋） 左：東京タワー

の波がそこまで押し寄せていた。そういう時期だったからこそ「車いすの外人」の健康的で明るい姿は「経済成長」とは別の価値を日本人に与えた。華やかなオリンピックと異なり、東京パラリンピックは静かに閉幕した。

《欧米との格差》

日本は21参加国中、13番目の成績で金メダルはわずか1個であった。日本選手団53名は、東京パラリンピック開催が決まり、寝ている患者を寄せ集めて、急遽選手に仕立て無理矢理出場させた者が大半であった。しかも日本選手団とはいえ18名は国立別府病院で中村が主治医をしていた。もとより成績は期待できなかった。車いすバスケットの試合には皇后陛下がご観戦にこられたが、フィリピンを相手に大差をつけられ惨敗し、中村は「早く終わってほしい」と願う有様であった。日本の車いすは体格に関係なく一つのサイズしかなく、英國の車いすが13kgなのに23kgもあった。欧米の選手は集尿器をとりつけているのに日本人は「おむつ」を使用していた。日本選手は二人がアキレス腱を損傷するなど14名の負傷者がでたが欧米の選手は一人が捻挫ただけであった。欧米の選手は多くの者が経済的に自立し、競技が終わるとスーツに着替え東京タワーの見学や、銀座のショッピングにくり出した。商談をする者もあった。しかし「外国人選手にもしものことがあったら、わが国の責任問題だ。選手1人に対し二人の自衛官をつけよう」といった話しが大真面目に議論された(図11)。日本選手団53名の中で就職している者はわずか5名であった。木材屋、時計修理、印刷の自営で他の48名は療養所か自宅で誰かに面倒をみてもらっていた。一方外国人選手はほとんどが仕事を持っていた。弁護士、会計士、秘書、事務員、電気技師、記者、本屋など仕事は多岐に及んでいた。外国人選手は顔色も明るく、筋骨逞しい。一方で日本選手は弱々しく顔色も悪かった。スポーツを普段から行っているかいないかではなく日常の生活がまるで違ったのである。東京パラリンピックは成功裡に終了した。日本の関係者は東京パラリンピックを成し遂げたという満足感の一方で、欧米選手の自立を目の当たりにし、その背景にある日本のリハビリテー

ションや社会福祉制度の立ち遅れを痛感していた。日本選手団長の中村は解団式で「社会の关心を集めためのムードづくりは終わりました。これからはチャリティにすがるのではなく、身障者が社会復帰し自立できるような施設を必ず作る必要があります。戦いはこれからです」と述べた。

《アベペとパラリンピック》

東京オリンピックでマラソン二連覇を成し遂げたエチオピアのアベペは「裸足の英雄」と称された。しかし三連覇を目指したメキシコオリンピックでは途中棄権となってしまった。ミュンヘンオリンピック出場を目指していたアベペは東京オリンピックの賞金で買った車で1969年アディス・アベバで交通事故をおこし、脊髄損傷となり車いすの生活となった。そして脊髄損傷医療の第一人者として世界中に知れ渡っていたグッドマンの治療を受けるべく渡英し、ストークマンデビル病院に入院した。アベペ入院は大ニュースであった。アベペは病院内でも大スターで、医者をはじめとする職員、他の入院患者、お見舞いに来た人達がサインを求め、一緒に写真撮影を希望した。数ヶ月後、帰国したアベペはアーチエリーの練習に励み、翌年の国際ストークマンデビル競技会にエチオピア代表のアーチエリー選手として出場した。1972年のミュンヘンオリンピック後のハイデンベルグパラリンピックにアベペが出場したかは不明であるが、メダルの記憶はない。1973年、脳出血により41歳という若さでアベペはこの世を去った。ただオリンピックの英雄アベペが、車いすで懸命にプレーする姿は、障害者の残存能力の高さを世界中に示し、多くの人に深い印象を与えたのである。

《東京パラリンピックの翌年に太陽の家創設》

日本社会は高度成長期に突入した。経済だけでなく、社会福祉の面でも先進国に追いつき追い越せの機運があった。中村は「今しかない」と決意し、東京パラリンピックの翌年、1965年に別府市の整形外科部長をしていた国立別府病院の隣接地に、障害者が自立し働く場として「No Charity, but a chance 保護より働く機会」を理念に社会福祉法人 太陽の家を創設した。国立病院医師としての国家公務員と社会福祉法人理事長の兼務は許されず、国立別府病院を辞し、太陽の家をとった。しかし「障害者を働くなんてかわいそう」という日本社会の中で、まとまった仕事の確保は困難を極めた。神棚を制作したり、マネキン人形を作ったり、ヤグラコタツを作ったりといった、いつ倒産するかもしれない自転車操業の日々が続いた(図12)。中村への誹謗中傷も後をたたなかつた。創設して7年経ち、1972年に立石電機株式会社(現 オムロン)創業者の立石一馬氏の理解を得て、太陽の家と立石電機との共同出資会社、オムロン太陽電機(株)が設立された。これによりmass productionが実施され、障害者の安定雇用が可能になった。ついで、SONY(株)創業者の井深大氏がSONY太陽(株)を、HONDA創業者の本田宗一郎さんがHONDA太陽(株)を設立した。永六輔さん、中村八大さん、秋山ちえこさんといった文化人も太陽の家を必死に応援した。以後、三菱商事(株)、デンソー(株)、富士通エフサス(株)と、共同



図12 1965年社会福祉法人 太陽の家開所。開所間もない太陽の家を昭和天皇・皇后両陛下が訪問された

出資会社を設立。2014年現在では8社の共同出資会社に1000人の障害者が働いている。中村は1974年にはアジア・オセアニアの途上国に障害者スポーツを通じてノーマライゼーションを実現しようと中村が会長となりフェスピック連盟を創設し、事務局を太陽の家においた。第一回大フェスピック大会(現アジアパラリンピック)は大分市・別府市で開催され、2014年には大韓民国のインチョンで第11回アジアパラリンピック大会は開催された。1981年には大分国際車いすマラソン大会が開催され、以後毎年大分市で開催され2014年には34回大会が行われた。

《国際パラブレジア医学会の開催と日本パラブレジア医学会の創設、日本障害者スポーツ協会の設立と身体障害者国民体育大会のはじまり》

東京パラリンピックと時期を同じにして国際パラブレジア医学会(現国際脊髄学会)が天児民和会長のもと東京で開催された(図13, 14)。また東京パラリンピックの2年後の1966年には日本パラブレジア医学会(現日本脊髄障害医学会)が創設され、第一回は天児民和会長のもと別府市で開催された。ここでは障害者スポーツのデモンストレーションが行われた。また東京パラリンピックの成功を受け、1965年に財団法人 日本身体障害者スポーツ協会(現日本障害者スポーツ協会)が設立され国体の後に、全国身体障害者スポーツ大会(現障害者スポーツ大会)を毎年開催することになった。第一回は東京パラリンピックの翌年、1965年の岐阜国体の開催後に行われた。このように東京パラリンピックがきっかけとなり脊髄損傷の学会と障害者の体育協会という全国的な組織が創設されたのである。

《2012年ロンドンパラリンピックと2020年二度目の東京パラリンピックへの期待》

1948年のロンドンオリンピック開催日に合わせ、パ



図13 国際パラブレジア医学会が天児民和花会長のもと開催された

ラリンピックの創設者であるグッドマンがわずか16名の退役軍人を集め、アーチエリー大会をストークマンデビル病院で開催してから64年が経過した2012年9月、ロンドンで二度目のオリンピック後に初めてのパラリンピックが開催された。グッドマンの娘、エバ・ルフラーさん（81歳）がパラリンピック選手村長を務めた。私はロンドンパラリンピックの閉会式に出席する合間に、太陽の家の職員とともにストークマンデビル病院を訪問した。1960年（著者の誕生年）にストークマンデビル病院に留学した中村が、驚嘆した英國の脊髄損傷の治療や、福祉政策は、今や日本と比較して特別なことは感じられなかった。少なくともロンドンより東京の方がはるかにパリアフリー化は進んでいると感じた。2020年に、1964年以来、56年ぶりに2度目の夏季オリンピック・パラリンピックが東京で開催されることが決まった。オリンピック・パラリンピックを2回開催するのは世界で初めてのことである。1964年の東京パラリンピックは敗戦後日本が戦後、欧米に追いつき追い越せ、先進国の仲間入りをしようという時期に開催された。1964年の東京では二部でしか開催できなかった「全ての障害を持つ人の参加する大会」も1988年の国際パラリンピック委員会（IPC）発足後は実現した。グッドマンが、自分の患者さんの治療と社会復帰のためにストークマンデビル病院で、医学的リハビリテーションとして始まったパラリンピックは、1988年のIPC発足時にはカナダの体育学の大学教授が会長となり、現在は英国の元車いすバスケットボールの選手が会長を務めている。パラリンピックは医師主導ではなくなり、リハビリテーションからスポーツへ転換していった。

著者は医師として国際ストークマンデビル競技会、フェスピック（現アジアパラリンピック）、パラリンピック、そして地元大分で毎年開催される大分国際車いすマラソン大会など、障害者スポーツに携わって30年になる。インチョンでのアジアパラリンピック大会での日本選手の戦績が毎日NHKで報道されるようになったことは驚きを禁じ得ないが、マスコミの報道姿勢とは別に、まだまだ障害者スポーツは、とても狭い一部の関係者の関心事以外でないと日々感じている。脊髄損傷も日本が先進国の仲間入りを目指していく高度成長期は交通戦争、炭坑の落盤事故など労災事



図14 天児民和（九州大学整形外科教授 当時）が国際パラブレジア医学会（現国際脊髄学会）の会長を務め、東京パラリンピックの翌年、第一回日本パラブレジア医学会（現日本脊髄障害医学会）を別府市で開催した。左よりグッドマン、中村裕、天児民和 東京パラリンピック会場にて 1964年

故の多発などで、多くの脊髄損傷者が発生したが、今やオートバイのヘルメット着用、オートバイ自体の利用者の減少、自動車のシートベルト着用、エアバッグの普及、飲酒運転取り締まり強化、労働安全管理の厳格化などにより大幅に減少している。大分国際車いすマラソン大会でも選手の高齢化、参加選手の減少が課題になっている。欧米では日本と異なり未だ戦場での脊髄損傷発症はあるとは思われるが、ノルマンディー上陸作戦での英國戦士の脊髄損傷者の治療と社会復帰を目的に、ストークマンデビル病院でグッドマンが始めた脊髄損傷者のスポーツは、別の意味で、脊髄損傷者だけでなく全ての障害者が参加する大会に転換発展していくと思われる。

2020年、世界で初めて二度目のパラリンピックを開催する日本は、1964年の東京パラリンピックを機会に、太陽の家、日本障害者スポーツ協会、身障団体、日本パラブレジア医学会が創設されたように、障害者を取り巻く環境のターニングポイントとなることを期待したい。華々しさや騒々しさでなく、静かで落ち着いた健やかなパラリンピックであることを期待している。

【文献】

- 1) 中村太郎：パラリンピックへの招待、2002；岩波書店
- 2) 行吉正一、米山淳一：東京オリンピックと新幹線 編集：東京都江戸博物館、2014；青幻舎

利益相反：無